ポスターセッション要旨

（コアタイムは 16 日(日)12:00-13:00）

ポスターセッション1
匿名掲示板における表層的な女性像の投稿言説分析
――「港区女子」を中心に

文博
（文教大学大学院・院生）

キーワード：女性像、ソーシャルメディア、ステレオタイプ

発表要旨

(1)調査・研究の目的

インターネットが発展した現在、ネット上では数々の議論が行われている。その中で、ネットによるフェミニズムの議論が広く可視化されるとともに、ネット世論の分極化が激しくなり、男女お互いに性別に対する不満や偏見が生じている。インターネット上で特定の女性像に関する語の流行や炎上事件もあり、激しい討論の中、表層的な女性像が注目を浴びている。

井上（1995）では、メディアにおける女性像はその時代の社会に期待される女性の姿形と生き方として描かれ、女性についての規範が表現されているがゆえに、メディアが男性によって支配されていると男性基準でメディアの女性像が描かれていると述べられている。これは男性から女性への要求と期待を表現し、男性の期待に応えられるような規範通りの女性像の強要とも捉えられる。表層的な女性像とは、従来の理想的な女性像と異なり、「表層的な理解で構築された女性イメージ」と「ステレオタイプ化された女性のイメージ」で構築された偏りのある女性像である。その代表となる一つの例として、ソーシャルメディアでよく言及される「港区女子」がある。「港区女子」は元々港区在住の女性を指す言葉だが、炎上事件やメディアの語りを通じて華やかな生活をソーシャルメディアで演出する女性のイメージに変わり、このようにしばしば高い理想の実現を目指す女性を揶揄する語として用いられている。

本研究では、ソーシャルメディアにて広く注目を集めた女性の称呼「港区女子」に着目して、ソーシャルメディアにおける表層的な女性像の語られ方の変遷を明らかにすることを目的とする。この目的を通じて、ジェンダーをめぐる議論の分極化を理解するための端緒としたい。

(2)調査・研究の方法・対象

本研究では、匿名ソーシャルメディアの 5 ちゃんねるを対象に、「港区女子」をキーワー

ドにして、投稿言説を分析する。2023 年 10 月 25 日までに「港区女子」という語を含む 354 件のスレッドの中で、レス数 100 回以上のスレッド(60 件)を抽出し、24,331 件のレスを分析する。

(3)現時点で得られた知見

第一に、匿名掲示板の利用には、現実や実名ソーシャルメディアと比べ、性的なステレオタイプや偏見が発言しやすい傾向が窺える。第二に、「港区女子」ついては、圧倒的に悪意を寄せる投稿が多かった。「港区女子」というバーチャルの女性像を通じて、裕福そうな女性に対する汚名化が進んでいる。

(4)今後の課題・展望

今後に残された最も大きな課題は、「港区女子」のような、表層的な女性像を代表できる分析事例を増やして、非匿名のメディアでの言説データも照らしながら、表層的な女性像の研究を進めることである。

ポスターセッション2

中国の主旋律映画の持つイメージの分析

朱富民（文教大学大学院・院生）
佐野昌己（文教大学）

キーワード：主旋律（プロパガンダ）映画、ナショナリズム、イメージ

発表要旨

(1)調査・研究の目的

本研究の目的は、中国の人々が主旋律映画に対して、実際にどのようなイメージを持つのかの検証である。近年、中国では主旋律映画の製作が増えている。主旋律映画とは、中国の大国イメージを宣伝することや民族アイデンティティを高揚させるために、様々なストーリーを描いた映画である。代表的な映画である「戦狼Ⅱ」(2017）と「1950 鋼の第 7 中隊」（2021）などは、いずれも中国歴代の興行収入を更新している。一方で、映画、書籍、音楽などの作品に対する口コミをチェックできる中国のウェブサイト「DOUBAN」で主旋律映画の評価は高くない。そこで、主旋律映画は評価が高くないにもかかわらず、歴代興行収入を更新する理由について、中国のナショナリズムを高揚させる影響を持つからと考えた。そこで、本研究では、中国の人々が主旋律映画に対してどのようなイメージを持つのか検証した。

(2)調査・研究の方法・対象

本研究では、「DOUBAN」で、中国映画のうち 2012 年から 2022 年にかけての主旋律映画を抽出し、他の中国人気映画と比べて、主旋律映画の特徴を検討する。また、主旋律映画のコメントや感想文をテキストマイニングしたものから、主旋律映画のナショナリズムへの影響を測る。

(3)結果と考察

主旋律映画は、典型タイプと商業主旋律映画の二種類に分けられることができる。典型タイプ主旋律映画は、製作公開されていても「DOUBAN」で評価とコメントをつけることがほぼできない。それに対して、商業主旋律映画には評価とコメントをつけることができる。調査の結果、この二種類映画へのコメントは違いがあることが分かった。典型タイプ主旋律映画へのコメントはいずれも好意的な言葉しかない。対して、商業主旋律映画への人気コメントと最新コメントは賛否両論である。さらに、中国の人気映画（非主旋律映画）へのコメントをテキストマイニングした結果から、主旋律映画と比べて、映画自体への評価に加えて、映画のテーマに対する議論やコメントが多いことがわかる。主旋律映画へのコメントには、映画自体へのコメントだけでなく、映画を起点として派生したコメントも多く、その中に

「愛国」、「祖国」、「人民」という民族アイデンティティに係わる単語が多く含まれている。これらのことから、中国の人々が主旋律映画に対して高い関心を持っているが、映画自体やその映画の描くテーマに対する評価が高いからではなく、ナショナリズムに関する感情を刺激されるからということがわかる。また、典型タイプと商業主旋律映画のコメントに差異があることは、主旋律映画によるナショナリズムの高揚の方向は一方的ではないことを示唆させる。

(4)今後の課題・展望

今後の課題として、主旋律映画に対するコメントのテキストマイニングしたデータをさらに分析し、主旋律映画に対して抱く感情の特徴を抽出する。そして、その特徴に基づいて、主旋律映画の役割とその効果・成果をアンケートから検証する。

ポスターセッション3

絵本原画の展示を通した社会運動―出版メディアにおける意識の変化

山内椋子

（東京大学大学院・院生）

キーワード：展示、絵本原画、童画、大正期、画家

発表要旨

⑴調査・研究の目的

本研究の目的は、絵本出版の制作過程において版下としての役割をもつ原画が、展覧会等の形式をとって公の場で展示されるにいたる影響関係と、「原画」じたいの捉えられ方に生じた変化についての歴史を明らかにすることにある。現在日本では、年間 100 近くの絵本原画展が開催されており、絵本という限られたジャンルの作品鑑賞という性格を持ちながらも幅広い年代の人々に享受されているという。それらは美術館や出版社が中心となって開催されていることが多く、しばしば「教育・美術・娯楽」等のキーワードをもって語られていることが確認できる。

しかし時代を遡ってみると、「絵本原画展」という名称はもちろん、子どもの目に触れる出版物の原画または絵を鑑賞する、という体験そのものが認知されていなかった大正・昭和期において、「展示」という行為じたいに制作の意義と分かち難く結びついた社会運動としての展示活動が存在した。現時点から振り返るとき、本発表でとり上げる 1920 年代から 1930 年代にかけての展覧会の事例は、戦後の絵本原画展の系譜に位置付けられるものなのか。つまりは戦後の原画展と比較するとき、どの程度の類似性、接続が見出せるか。「展示」という行為じたいの性質とともに考察していく。

⑵調査・研究の方法・対象

本研究では、「童画」というキーワードを中心に、戦前の原画展示と児童出版をめぐる組織的活動に関する記録を参照する。そして戦後の絵本原画展の歴史を整理したうえで、それらの事象に継承されたもの/そうでないものについて分析し、その要因を考察した。

⑶現時点で得られた知見

1925 年に子どもへ向けた絵の展覧会を開催したとされる武井武雄の呼びかけによってはじまった日本童画家協会という組織がある。そうした画家同士のつながりを素地にして原画展が開催されていく。企画の背景には出版画家の問題意識があらわれている。それは、出版メディア内での待遇に関する問題提起、出版という枠組みにおいて「絵を描く」という創作の定義を再考する必要性であった。そうした「作品の位置付けへの抵抗」、「制作とは何かという問い」を含意する戦前の絵本原画展は、当時の人々には目新しく感じられる試みであ

ったことが確認される。

一方で、戦後に「絵本原画展」の知名度を上げた要因は、出版社による原画展の主催や、国際絵本原画展への参加、また絵本美術館の誕生にあったと考えられている。現在も画家が主体となる原画の展示がおこなわれているが、1970 年代以降に形成された「絵本原画展」のイメージの枠内で、絵本出版や作品の紹介を主眼とするものとして残っている。

⑷今後の課題・展望

戦後の絵本原画展については画家や編集者によって残された回想から当時の状況を分析しているが、制作過程における画家と編集者のやり取りを知ることのできる記録について、その種類・所在を調査することが必要である。それにより、主要な出版社または著名な編集者の視点を軸に形成されてきた絵本文化史を、画家の目線を加えて捉え直すことを目指している。また 1960 年代から 1970 年代前半は、原画の取り扱いに関して各出版社内での対応に変化が生じ、作品としての原画が徐々に認識されはじめる時期である。ゆえに当該期間における絵本原画展に関する資料は、戦後の原画展の変遷を知るうえで重要なものと考えられる。

ポスターセッション4
（研究活動委員会企画1）
学会研究活動が“ときめく”方法を考えよう
――「新たな部会編成」を考えるための前準備

丸山友美（静岡大学）
第 39 期研究活動委員会

キーワード：新たな部会編成，将来構想，ブレインストーミング，マインドマップ，学会研究活動

発表要旨

1)調査・研究の目的

本ポスターセッションは，ワークショップ「（研究活動委員会企画２）学会研究活動をどう再編すべきか？―メディアと社会の未来を見据えて」と連携して，よりよい部会のあり方を検討するための前準備を行うものである。具体的には，ポスターセッション会場にワークシートと付箋とペンを設置して，春季大会参加者にそれぞれの考えやアイディアを共有してもらうことを試みる。

部会をめぐる現在的な問題は，次の３つがある。

一つ目は，研究テーマや領域が重複する部会が複数存在することである。このことは同時に，現状の部会編成のままでは会員が新規の研究テーマを開拓したり，大会参加者が新たな研究テーマと出会ったりする機会を十分に提供できないという問題を生じさせもする。

二つ目は，多様なバックグラウンドを持つ会員の問題関心を十分に掘り下げられる部会が必ずしも多くはないということである。これまで本学会には，研究者だけではなく，新聞・出版・放送・広告業界で活躍する実務者が多く参加してきた。今後はさらに，ICT や AI，そして XR といった情報技術の開発・運用に携わる実務者の参加が期待される。こうした専門人材と研究者がメディア技術について議論する場を創出するには，部会の構成を検討し，再編成する必要がある。

三つ目は，部会の運営が「担当理事中心になりやすい」ということである。これまで部会の編成と構成は，理事会によって決定され、担当理事を中心に運営されてきた。そのことの意義を認めつつも、学会及び部会の運営をより良いものにするには，会員一人一人の声が届く回路の整備が必要である。

以上の問題の解決策を模索するため，本ポスターセッションはミニワークを大会参加者に行ってもらう。このような取り組みを通して可視化したいのは，「私たちはどんなメディア／研究に興味を持っていて，日本メディア学会でこれからどんなメディア研究／実践を行っていきたいと思っているのか」ということである。誰もが安心・安全に，そして楽しめ

る学会にするためにはどうしたらいいのか。本ポスターセッションでは，専門や所属，性別や年齢，国籍，経歴などにとらわれず，さまざまな声を互いに共有することを目指す。

2)調査・研究の方法・対象

A0 サイズのポスター用紙（ワークシート）を 2 枚，色とりどりの付箋，そして色ペンを複数準備して，春季大会参加者に日本メディア学会の部会編成に対する考えやアイディアを付箋に書き出し，それをワークシートに貼ってもらう。本ポスターセッションは，ワークショップでの議論の材料を準備するもののため，学会メーリングリストや学会ホームページ等を通して，春季大会の開催前から参加者にポスターセッションへの投稿を呼びかける。また，大会初日には，受付前にワークシートを設置する。なお，ここで作成したワークシートは，その後に開催するワークショップ「(研究活動委員会企画２）学会研究活動をどう再編すべきか？―メディアと社会の未来を見据えて」で使用する。

3)　今後の課題・展望

本ポスターセッションと連携企画のワークショップでの議論を踏まえて，研究活動委員会を中心に理事会でも議論を重ねながら，日本メディア学会の部会編成の検討に着手する。部会の編成をめぐる議論の進捗は，学会メーリングリストや学会ホームページ等を通して定期的に会員に報告する。そのうえで,2025 年春季大会にて今後の部会のあり方について提起することを目指したい。